

タッチダウン、パスは投げられた



日沖 靖×山中 章×塚本 明

「アメフト」町長誕生！

山中章 考古学を教えております山中です。今日はよろしくお願ひ致します。

地方国立大学である三重大学、なかでも人文文学部のような文系学部は、独立行政法人化という動きを前にして、大学の将来像をめぐって方向性を探っているところ です。

そんな中で昨年私たちは、大安町の宇賀新田古墳群の発掘調査をすることになり、町と縁が出来ました。私は調査を進めるなかで大安町の魅力にとりつかれたものですから、大安町の歴史と文化を通して地域社会と積極的に関わっていくことで大学の活路が見出せるのではないかと思ひ、ユニークな経歴をお持ちの町長と意見を交換させていただこうということになったのです。また、これを通して大学側が何をしているのか、何を考えているのかを、積極的に発信していきたいとも考えております。

塚本明 江戸時代の歴史を教えております塚本です。

投げられた

三重県下のあちこちに資料調査に行っていますが、大安町は初めてです。しかし日沖町長のお名前はずっと以前から存じ上げておりました。と言いますのも町長は、もと京都大学アメリカンフットボール部の名選手で、現在もコーチを務めておられる。私は学生時代、研究室の後輩にアメフトの選手が多かったこともあり、よく見に行っていたのです。日沖コーチが地元に戻られたと聞き、これでアメフトは弱くなる、と危惧したものです。それにしても町長は、農学部で農芸化学という理系の学問を学ばれ、商社マン、二年間のアメリカ留学という経歴もお持ちである。いわば合理主義、近代主義の世界から、いきなり町役場の世界に入られた。なぜそうなったのか、またさぞかしギャップがあったのではないかと思うのですが、いかがですか。

日沖靖 町長になったきっかけは…、まあだまされたんですね(笑)。最初は摩擦もあったんですよ。町職員の方々は、最初の頃は私の悪口をネタによく飲んでいました(笑)。今は二期目で、お互いに段々分かってきて、理解も深まりました。いっぺんにやっても無

関所をにらむ町

理ですし、少しずつ徐々に変えていく。今一番必要なことから優先順位を付けてやっています。まあ、アメフトの主将を務めた時と、町長になった時と、課題は共通してましたね。

山中 さて大安町の歴史の意味について最初にお話しようと思います。この地域は、古代三関のうちの一つ、鈴鹿関と不破関の三角形で結んだ頂点に位置するんです。古代大和政権にとって、出口は二つある。その両方を見渡せるこの地域は、東国を抑える必要上、大変貴重だったと思うんです。大安町の町名の由来である大安寺という寺、これは日本で最初に国家が建てた寺ですが、奈良時代のこの地域に、大安寺はなぜ五百町歩という膨大な敷地を持つことができたのか。それは大和政権がこの地に注目していたことの証拠の一つではないかと思つたのです。人の面を言えば大和政権は、この土地の豪族を抑えないといけない。今だったら日沖町長の首根っこを抑えなければ、おちおち眠れないという状況だったのです(笑)。その具体的な現れが、大海人皇子、後の天武天皇が、壬申の乱の時にまず伊賀に入りすぐに美濃に使者を出し、兵を募らせた。その間に自分も大和からこの地域を拠点に鈴鹿関を抑える。そして軍隊を組織して一気に近江に攻め込み、勝利を収める。日本の歴史を大転換させたのは壬申の乱

だと思っんですが、まさにこの地は壬申の乱作戦本部
だったわけですね。

日沖 マスコミが飛びつきそうなお話ですね。

塚本 中世史については素人なのですが、この地域は
院政期には伊勢平氏の拠点であり、室町時代には幕府
の直轄軍である奉公衆の有力な地盤であった。この地
域が中央政界の重要な政権基盤であったという構造が、
中世以降にも引き継がれているわけですね。

経済的背景の一つに、八風街道の存在があります。
中世の近江商人は伊勢商人と競合しつつ、八風街道を
通って東海地方の産物を移入し、近江や京都などで売
りさばっていた。近江商人と伊勢商人とは前近代にお
ける二大商人集団なのですが、この地は両者が接する
地点であった訳です。近江の有力守護大名の六角氏が
この地の有力者梅戸氏に養子を送ったのは、商業ルー
トの確保のためとされています。また街道添いに、江戸
時代には歴史地理学者の松宮周節や女流俳人の日置て
い女が出るなど、文化が栄えたことも興味深いですね。
日沖 なるほど。今、町内の幹線道路の整備を進めて
いるところなのですが、そうした歴史的な意味がはっ
きりすると、説得力のある運動になります。

現場で学ぶ

山中 先に申したことは、大安町を漠然と町史などを
見ていると思いつかなかったことだと思っんです。今
回実際に掘って、現地に立ってみてよく分かってくる。



古墳の成り立ちを説明する

実は宇賀新田古墳群をテーマに卒論に取り組んでいる
学生がいるんですが、発掘に参加し、自分で大安町を
歩き回り、他の地域と比較検討することで随分よい卒
論になった。宇賀新田の石室の構造は、北勢の海辺の
方とは大分違う。むしろ美濃の不破の関周辺の豪族、
そして大和政権と結びつきの深い社会だということが
分かってきたんです。学生が実際に現地に入ることによ
って新鮮な驚きを持ったからこそ、新しい発見がで
きたのだと思っんです。

一方で発掘の現地説明会などで壬申の乱などの話を
しますと、本での知識ではなく、よりリアルに、自分
たちの住んでいる所が意味のある場所だということを実
感していただけ。子供たちにもうまく伝えられ
ば、地域の歴史についての知識が定着していくわけで、
そうした情報を発信していく必要を感じます。

塚本 私は昨年と今年で、志摩郡の磯部町で学生と一
緒に古文書の調査をやっているのですが、学生たちが

◎鼎談◎ 日沖 靖×山中 章×塚本 明

大学の教室とはまったく違う新鮮な刺激を受けている
のを、強く感じます。

ついでに言えば、ひと昔前は江戸時代の村を知るに
は現地に入らなければ駄目だと言われていた。ところが
現代では、図書館とか文書館とかで研究ができてしま
う。その結果、歴史学のダイナミズムが失われてい
るのではないか。大学の生き残り戦略などという問題
とは別に、学問の活性化のためにも、地域に入ってい
くことは必要なことだと思っます。

山中 大学側にもメリットがあるし、また地域（郷土）
への愛着を掘り起こすために、行政の人と一緒に、情
報を伝えていく。大学がそのような姿勢を示したら、
行政の方で大学を利用しようというお考えはありませ
んか。

コーディネーターは誰？

日沖 一番の問題は、大学とは接点がない、ということ
です。大学がどういうことを研究しているのか、情報
もないし、地域との間でコーディネーターする人がいな
い。大学には専門家はいるのですが、それをマネ
ージメントする人がいないわけです。

例えば手っ取り早いのは講演会ですよね。大安町で
も年に五回から一〇回の講演会を開いているわけです。
講演者はどうやって決めるかというと、まず予算が付
いて、その消化のためにイベント屋さんのリストから
選ぶ。当然、予算の何割かはイベント屋さんに行つて

背景は宇賀新田4号墳石室



日沖 靖
ひおき やすし

大安町町長
1958年生。住友商事、京大アメフト部コーチ等を経て、
1995年より現職。

の職員が就き、地域の文化運動を担っていく、ということだと思えます。そうした人がいれば、他地域や研究機関とのネットワークもできる。ネットワークをコーディネートするのは、大学の役目でしょうが。
山中 そうですね。一回きりの行事でなく、地道に人々の興味を持てるものを発信していくべきです。自分たちの住んでいる地域が面白いということに気付かせないといけない。

マニュアルなんかいらない

塚本 「大安町史」を読んでちよつと興味を持ったのは、大分昔の成果ですけど、員弁高等学校の郷土研究部の研究成果が結構使われているんです。昔は高校でこうした活動による地域文化への貢献があった。今は、大学がそれをやるべきではないか、とも思います。
日沖 高校でそれができたのは、自分で課題をつかむ教育をしていたからなのでしょうね。フットボールでも同じなんです。実は京大アメフト部は今年から専任コーチを廃止したんです。最近はずが教えずぎてマニュアル化が進んだ結果、却って弱くなってしまった。選手がロボットになってしまい、勝ち負けだけにこだわる。本当はその過程が大事なはずなんです。そこで背水の陣でコーチをなくした。方向性だけ監督が指示して、後は自分で考えろと。マニュアルで通用するのは入試の突破くらいで、本当に能力を発揮できるかどうかは自分で応用しないといけない。知識では

なく、知恵を付けなければだめ。

今の受験制度は易しい問題で高得点を競うシステムですから、「術」を教え込まないといけない。その結果が、創意工夫の低下になっていると思うんです。アメフトなんでものは一種の教育で、創意工夫を身につけ社会に還元していくことが目標だと思います。

山中 私たちのような文系学部でやっていることは、大体が直接には役に立たない学問です。私も考古学を志した時には親に反対されました。なんでそんなところへいくんや、就職がないぞ、と。事実、私も大学を出てしばらくはいろんな職業を転々となりました。でも文学でも哲学でも考古学でも、何か物事に熱中して問題点を解きほぐす経験をしておれば、卒業したあと全く関係ない仕事でも対応できると思うんです。ところが今の学生は、就職に有利かとかいったことで進路を決めてしまう。

塚本 同感です。専門に徹することで何らかの創意工夫が身に付く。専門性が高いことで応用力が出てくる。高い山に上れば視野が開けると同じですよ。広く薄くの学生は、結局マニュアルがないと行動できない。日沖 それはアメフトのOBによく言われました。ひと通りで接するか一流で接するか。一芸に秀でると、秀でたその高みで物が見えてくる。最近は学生が勘違いして、いろいろやらねば駄目、と思っているふしがある。でも、高さが人間の本質の価値を決めると思う。広さはあとどうにでもなるんですよ。中途半端が一番いけない。あきらめるところはあきらめて、自分を認識し、社会での活かし方を考えねばいけない。

しまう。よくあるんですよ、行政主導の講演で動員かけて、興味がないから寝ている（笑）。大学に講演を依頼しようにも窓口がない。行政側にも担当できる人がいないこともあるけれど、大体、学者さんは情報の使い方がへたですよ。マスコミの利用の仕方にして。企画さえ示されれば行政側はけっこう乗るものなんです。

塚本 耳が痛いですね。まあ歴史学の大学教員と行政との接点としては、一番多い形は自治体史編纂事業だとは思いますが、問題なのは本が出来てしまおうと行政側も大学側もおしまいなってしまう。理想としては、自治体史事業のあとで博物館なり資料館なりが作られ、そこに、地域文化総体に愛情を持つ専任

塚本 三重大学の活かし方、にも通じる話ですね(笑)。

光る玉、出でよ

山中 うちのような地方国立大では、都会の有名校に引け目を感じている学生が結構いる。だけど今の偏差値教育では、昔ならばどこでも行けた学生が訓練がへただったから地方国立大に来ている。磨けば光る玉もきつとあるはずなんです。それを見つけて、玉を輝かせて社会に戻していく。教員がうまく導いていかねばならないと思います。

塚本 受験競争に毒されれば毒されるほど創意工夫が



塚本 明
つかもとあきら

三重大学人文学部助教授・日本近世史
1960年生。京都大学助手を経て、1995年より現職。

なくなっていく。知識が細分化されて。そうなると、むしろ地方国立大の方が可能性があるとも言える。

日沖 そうですね。一芸重視じゃないですが、アインシュタインもそうでしたしね。

山中 特に三重大大学の場合、親の意向で都会に出ずに来た優秀な子が多い。こうした子はずっと地元に残るわけですよ。真剣に自分の生きている場所について考えるチャンスもある。そうした子を活かすためには、難しいかも知れませんが行政の方で人事の採用も少し考えて欲しい。単に成績だけでなく、地域に真剣に愛情を持つ人間を積極的に採用していく必要があると思います。人を育てるのは大学の役割ですが、地域で輝かせて欲しいんです。そうすることによって地方大学も活きるし、人材の流出を防げると思います。

日沖 私も母校にはよく人材をひっぱりに行ってるんですよ。三重大にも行きたいですね。

山中 町長、是非三重大にスカウトと講演に来て下さいよ。講演料安いんですけど。

日沖 いやいや、ボランティアでもよろしいですけど。まあ、こちらとしても何か接点が良いですね。理学部やアメフトの学生しか知りませんから。

「大安物語」をベストセラーに

山中 さて、今までのお話のように、大学がこれから地域社会と関係を深めていこうとした時、行政と一緒に何ができるか、という問題ですが。



大安町小学校の体験学習にて

日沖 具体性が必要ですよ。住民に「うける」企画がないと潰れてしまう。成果をあげることで次につながる。具体的に何か事業がないと、こちらもやりにくい。

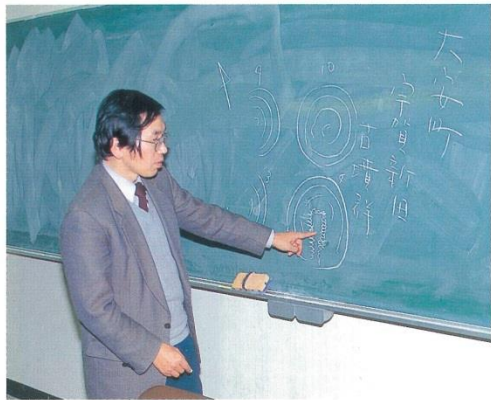
町としても、住民のみなさんが大安町のことを知ること意識が高まるのは大変良いことだと思ふ。町が活性化し、元気になる。やはり所属の喜び、というのがありますね。アイデンティティ。誇りを持てるようになる嬉しいですよ。でも、どういう手があるのでしようね。地域の歴史文化に関心の高い人は決して多

くないんですよ。

塚本 三重県がおしなべてそうなんです。歴史的文化遺産は実に豊富なのですが、あまりに活用されていない。その落差の大きさは全国でも有数だと思います。大学側の責任もありますが、行政にも頑張ってもらいたい。行政はとかく横並び意識がありますが、一つが変われば周辺も変わっていく。そしてそれは、小回りの大きく町などの方が可能性があるのではないのでしょうか。三重大も同じですが、小さいことを逆手にとらなければ損ですよ。

日沖 それはまったくそうですね。町役場の場合、間接管理ではなく直接ですから。町役場の場合、間

例えば、今までのものとはまったく違う切り口で、



山中 章
やまなかあきら

三重大学人文学部教授・考古学
1948年生。向日市埋蔵文化財センター長等を経て、
1998年より現職。

新たな町史を作るといえることはできるんでしょうか。具体的な形で提案して貰えれば、予算は付けられると思います。

山中 今の大安町史はよく調べて作り上げられており、我々もまずこれにあたるんですが、住民の人でこれを読む人は少ないと思うんですね。子供にも分かり易く、専門的なことをかみ砕いて書く、これはとても難しいが、一番必要なことではないか。会話をしているなどすることで、地元の人に、具体的なシーンがよみがえるような工夫が必要だと思います。

日沖 学校の教材としての、大安町の歴史の教科書作りはどうでしょう。一度学校の先生達と相談して見ますよ。やる気になる人が出てこない、うまくは行きませんか。

山中 では、私の方でまず古代の「大安物語」を書いてみましょう。

日沖 それは大変ありがたい企画ですね。是非検討してみましよう。

山中 最後に具体的な計画も出来ましたし、大学側としても今後、大安町に限りますが、発掘や文書調査などを通して、また地域の歴史を分かり易く作るなど、色々な形で情報を発信して、地域との関係を築いて行きたいと思っています。今日はありがとうございました。

(二〇〇〇年一月一日、大安町役場にて)



古墳の説明に聞き入る子供たち